

昭和39年度 沿岸漁業集団研修 エヴァリュエーション報告書

昭和40年3月

海外技術協力事業団国内事業部



國際協力事業団

受入 月日	'84. 5. 21	0000 1489
登録No.	061107	67A

JICA LIBRARY

序



1015122E3J

この報告書は沿岸漁業集団研修について開催されたエヴァリュエーションミーティングならびに研修員より提出されたファイナル・レポートにもとづいて作成したものである。

エヴァリュエーション・ミーティングは下記により実施された。

記

日 時：昭和 40 年 3 月 16 日 10:00 ~ 12:00

場 所：三崎国際水産研修センター

出席者：15名

国 稷	氏 名	職 名
Ceylon	T.H. Gajanayake	ネゴンボ漁業訓練センター要員
"	A.R. Ganendra	"
Indonesia	J.J. Lawalta	ジャカルタ水産庁技官
"	Siswadi	"
Nigeria	A.R. Obih	農務省(エヌク)二級技官補
"	T.E. Aggo	連邦水産事業省(ラゴス)技官
"	J.H. Dansu	西部州(イバダン)農業天然資源省 省水產場助手
"	I.D. Ivoko	水產普及事業局水產場二級助手
Phillipines	F.T. Pili	フィリピン水產委員会指導官
"	A.R. Tolentino	" " 水產物検査 官
Sudan	A.A. Mohammed	動物資源省漁業官補佐
Tanganyika	L. Irafay	地域開発協力組合省地域開発部助 手
"	A.S. Alidina	"

Thailand W. Chomdey 水産局調査研究部技官
" C. Girasthit " プケット水産試験場長

三崎センター 松本館長
豊島研修監理員
金城研修監理員
研修第二課 皇 捕 佐
八島職員

(1) 研修概要：

本コースは昨年5月21日に開始され、以後1ヶ月の研修期間を経て来る3月17日の閉講式をもつて終了した。研修は三崎センターを中心に、近県諸施設等の見学、関西中国方面への研修旅行をふくめておこなわれた。この間、講義と討議では日本の一般漁業、航法及びその用具、養殖、漁業法規、漁業気象、その他沿岸漁業に関する諸知識を学び、また実習では魚網製作、漁撈、エンジン運転等をおこなつた。さらにコースの最後での補修研修は各人の個別の要望を満たした。

(2) 研修員の所感：

本研修について、多くの研修員は「新しい有益な知識、技術を得ると同時に各国から集まつた水産関係者との交流を通じて、各国の水産事情を知りあわせて親善の実をあげ得たことに大いに満足した。」と述べた。このようにエヴァリュエーションを通じて、本コースがきわめて成功裏に修了したという印象を与えている。いま具体的に、これを昨年10月におこなわれた中間エヴァリュエーションの際の研修員の要望と比較してみると、当時の要望の中で共通した研修科目としてはディーゼルエンジン、養殖、漁具の作成、水産加工等があり、また個人的なものとしては漁業組合、真珠養殖、海洋生物学等があつたが今回のエヴァリュエーションでは、前者に共通したものは殆んど充たされたことがわかつた。ただ、後者にみられた特定の個人的要望の中には後述するように、今回のエヴァリュエーションでも依然として問題として残つたものがあつた。

このようにいくつかの問題点が残つているとしても、コース全体としては補修研修の実施（期間の問題はあるにせよ）日本語教育の充実等によつて多くの研修員の満足を得たといえよう。

以下、本研修をいろいろの角度から詳細にみていく。

(1) 講義について

講義に関しては多くの研修員が満足したと述べたが、同時に次のような希望ものべられた。それは科目に関するものと、講義の方法に関するものに大別できる。

① 科目に関するもの

科目については、研修員に共通したものは殆んどなかつた。即ちここに上げられるものはきわめて個別の性格が強く補修研修の充実に対する要望として、おるべきものであるかも知れない。

- 漁業統計の研修をとり入れてほしい。(Pili. フィリピン)
- 冷凍技術及びその他の保存技術の研修 (Aggo. ナイジエリヤ)
(Ivoko. ナイジエリヤ)
- 協同組合の実際の活動面についての研修 (Obih. ナイジエリヤ)
- 海洋生物等についての研修 (Lawalata. インドネシア)

② 講義の方法について

ここではかなり共通した要望がみられた。

- 理解をたすけるため、時間を節約するために英文のサマリーを事前に準備してほしい。 (Pili. フィリピン) (Tolentino. フィリピン)
- 講義の際の質問はできるだけ別に時間をとつてほしい。今回は講義の最中に質問が行われて講義の方向が変えられたり、時間をひだりしたりした。 (Pili. フィリピン) (Gajanayake. セイロン) (Tolentino. フィリピン) 等他多くの研修員この質問の時間を講義から分離してほしいということは適切な示唆と思われる。

(2) 実習について

今回の研修では、気象上、設備上(アシア丸の大きさ)のこともありセンター側のあらゆる努力にもかかわらず、実習はかなり不安定な条件下に置かれた。このため多くの研修員から「実習をもつとふやしてほ

しい」という声が聞かれたように、実習量の少かつたことはまぬがれなかつたようだ。この問題を解決するためには実習船の整備が前提となるが、その意味で来年度の実習船の新造には大きな期待がもたれる。

なお、Siwadi（インドネシア）は「漁民と接触した実習」を要望した。

(3) センターの研修設備について

本コースが三崎センターにおいて、事業団の直接の管理の下に運営されたのであれば、その設備等に対する研修員の希望はやはり重視しなければならないだろう。この点についてエヴァリュエーションの席上、研修員と交された意見をここに述べる。

① 多くの研修員からセンター内に魚の加工、保存の実習に利用できる施設の設置が希望された。これに対し松本館長は：「センターにそのような設備を設置しても、三崎近辺にある小工場の域を出ず、当面近辺の工場を利用することで充分であろう。」

次に、そのような設備があつても実際に実習する期間は、きわめて短かいため遊休施設となる公算が強い。それよりもセンターとしては実習船の拡充が急務である。幸にして来年度は5トンの新船が建造される予定であるので、既存のアジア丸と併用するつもりであるが、センターの希望としては近い将来、さらにもう一隻同じものをふやしてすでに老朽化したアジア丸に替え、一層の海洋実習の充実を計りたい。以上の理由から当面、それ以外の設備の拡充については考えていな」……と述べた。

この回答によつて、多くの研修員は充分に納得した。

② 次に研修員は図書資料の充実を強く望んだ。この件は先の中間エヴァリュエーションの際にも望まれ、その後も続いているものであるが、これについてはセンター側から銳意集収に努力しているが、何分量が少く、非常に難行しているという答があつた。これに対し研修員から

のような suggestions があつた。

- FAOとの資料の交換を進める及び FAOの出版資料を購入する等のことが考えられる。
- 研修員を送り出している東南アジア諸国で出される英文資料を収すること。これについては研修員側も帰国後大いに協力することであつた。

いずれにしろ、日本で発行される英文の資料が少いのであれば、以上のような方法は非常に参考になると思う。

- 最後に研修員はアジア丸をより大きなものに作り変えてほしいと要望したが、これには松本館長から、本年 5 トンの新船を建造する予定であるとの答があつた。

(4) 日本語教育について

三崎センターの日本語教育は 11 ケ月という期間を考慮して、OTCA のテキスト以外に「ひらがな、カタカナ」を教授したが、多くの研修員はこの点について、充分効果があつたことを認めた。実際にも日常会話等には殆んど不自由を感じない程度になつてゐたようである。しかし大半の研修員が現状で充分であると述べた一方には「交法まで及ぼしてほしい」という声があつたのも事実である。

いずれにしても、現在の OTCA のテキストが短期速成の原則の下に生まれたのであれば、より長期な研修員に対しては別途の方法が講じられなければならないだろう。

(5) 研修期間について

研修期間については、15 人中 9 人（この中には 9 ケ月に短縮でき得るというスー・ダンの Mohamed を含む）が、11 ケ月で充分であると述べた。

(6) 補修研修について

本コースでは補修研修という名の下にコースの最後に、各研修員の希

望に従つて個別研修をおこなつたが、これには各研修員とも非常に賛同を示した。これによつて、中間エヴァリュエーションの際、表明された特定な個別的希望の多くが満たされたと見てよいと思われる。

しかしあはりこのための期間が短かいといふ声はきかれた。これはたとえ前記において全体の期間が充分であると述べた研修員についてもいえることである。

(3) 研修外のことについての研修員の要望

多くの研修員は三崎センターの日常生活については、殆んど完全に満足を表明していた。特にリエクリエーションの面についても、三崎センターOTCAの払つた努力を充分に認め、感謝の意を述べた。

ただこのリエクリエーションの一つである、日本の祭への参加については、イボコ(ナイシエリヤ)が「各人の宗教的立場をもつと尊重してほしい。自分の例をとれば、自分はキリスト教徒であるため、もし日本の祭が宗教に関係していると知つていたなら参加しなかつたであろう」と述べたがこれは外国人のなかには日本人と異つて、宗教に対してきわめて厳しいものがあることを物語るもので今後は留意すべきことであろう。

(4) 帰国後の問題

(1) 研修技術の応用について

研修員の多くは、「開発途上にある国にとって一次産業の発展は、国民生活の向上及び産業の発展の基礎となるものであり、非常に重要である」と理解しており、したがつて今回の滞日研修は極めて有益で、帰国後充分に活用できるものであると述べた。

(2) 帰国後のOTCAとの関係について

帰国後のOTCA、特に三崎センターとの結びつきは全研修員が強く望んだものであつたが、これに関しては、「今回の研修は日本の進んだ

漁業技術を学び得たというだけでなく、この11ヶ月の研修を通じて、同じような状態にある各国の研修員との友情或は技術の交流を達成できた」と述べられているように、彼等にとつて三崎センターは日本の技術を学んだ中心であるばかりでなく、彼等の交流の中心でもあつたことが解る。その意味で、このエヴァリュエーションの席上、同窓会誌ともいふべき「Misaki Correspondence」創刊号が完成し、各研修員に配られたことはきわめて強い印象を残した。

